

# 町史

とっておきの話

236

福島県立博物館専門員

佐々木 長生

## 町民が生んだ只見の宝「民具」⑥

日本一の民具を  
未来に伝えよう！

民具という言葉は、昭和十年ころ、財界人で民俗学者でもあった渋沢敬三（実業家・渋沢栄一の孫）がつくった造語です。彼は、民具とは「庶民が日常生活の必要から作った身近な道具」であると定義しています。民具は身近な素材を利用して作られるため、その土地の気候や自然環境、生業形態によって違いがみられます。また長い歴史の中の創意・工夫によって作りだされたものであり、私たちの手足の延長としての道具ともいえます。

このようなことから考えると、只見町の民具は、只見の人々が雪・山・川という恵まれた自然環境のなかで長い時間をかけて作りあげてきた民俗文化の結晶といえます。前回まで紹介されてきたように、只見町では早くから民具の収集がおこなわれ保管されてきました。このような事例は全国各地にあります。数多くある民具コレクションのなかでも、只見町の民具が日本一と誇れるものがあります。それは九九〇〇枚にのぼる「民俗資料調査カード」です。これには、一点一点の民具ごとに、名称、寸法、使用方法、思い出などが詳細に書かれています。

調査カードに記入するのは、一般には博物館や資料館・教育委員会などの学芸員が

しています。したがって、その記載内容は聞き取りによって再構成された二次資料です。しかし、只見町では町民自らが記入しているのです。この場合、只見の自然環境で暮らしその生活感覚を持った町民が記入するため、素材や形態、使用方法などについて重要な一次情報が書かれています。これは民具研究のうえで、きわめて学術価値の高いものです。

さらに調査カードに記入する際、一人で記録するのではなく、二〜三人がそれぞれの体験や記憶を自由に箇条書きで記入しています。また、製作方法や使用方法をわかりやすいスケッチにして描いています。これは只見町の調査カードだけにある特色です。記入にあたっては、みんなで談笑しながら思い出を語り合うという雰囲気の中で進められました。五十代から八十代までの人が自ら記入するばかりでなく、集落による名称や使い方の違いなどにも言及して、民具の変遷や地域性もあきらかにしました。

これらの成果は、平成四年、『図説会津只見の民具』という本に結実しました。この本には民具整理にかかわった町民が参加して、民具を使用したり製作したりしている写真が載っています。実際の使用者・製作者による再現なので、一枚一枚の写真が何にも代えがたい説明となっています。

町民自らが民具を収集・整理・記録するという只見方式は、文化庁まで知られるようになってきました。平成九年六月には、文化庁の主任文化財調査官が只見町を視察し、民具そのものの資料価値はもとより、町民の手による調査カードの充実した内容に注目しました。それがきっかけとなって平成十五年、国



▲詳細に記録された民俗資料調査カード

指定重要有形民俗文化財「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」二・三・三三点が誕生したのです。

調査カードに込められた只見町の民俗や文化を、これから町の担い手となる子どもたちに伝えていくのは、只見町民の責務と言えます。日本一の「民具と調査カード」を後世に伝え、その価値を町内外に広めるためにも、収集・展示する施設の建設は急務です。

只見町は、今年ユネスコエコパークに登録される予定と聞いています。ブナ天然林に育まれた大自然の恵みを受けながら只見の民具は製作され継承されてきました。持続可能な地域発展をめざすユネスコエコパークにおいて、只見町の民具は祖先から受け継がれてきた誇りであり宝ともいえるものです。この民具が、只見町の民俗文化遺産として未来まで輝き続けてほしいと願っています。



▲カードに民具の思い出を記入する